

吾妻山の火山活動解説資料（令和8年7月）

仙台管区气象台
地域火山監視・警報センター

山体浅部における熱水活動が高まる傾向がわずかに認められますが、火山活動は概ね静穏に経過しています。火山ガスや噴気・地熱の活動は継続していますので、入山する際には注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2、図3）

上野寺監視カメラ及び浄土平監視カメラ（東北地方整備局）による観測では、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状況に変化は認められませんでした。大穴火口の噴気の高さは100m以下で経過しました。浄土平3監視カメラの熱映像データを用いた解析では、2026年以降、大穴火口の一部の噴気温度が高い値で推移しています。

・地震や微動の発生状況（図4）

火山性地震は概ね少ない状態で経過していますが、2026年5月以降、わずかに増加しています。また、低周波地震及び火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図5、図6、図10）

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計では、2026年4月以降、火山活動に起因すると考えられる大穴火口方向の隆起を示す北西～西上がりの変動がみられています。

GNSS連続観測における大穴火口周辺の短い基線及び吾妻山周辺の長い基線では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

・全磁力変化の状況（図7、図8）

全磁力連続観測では、2023年後半以降、火山活動に伴う明瞭な変化は認められません。

○ 活動評価

火山性地震は概ね少ない状態で経過していますが、2026年5月以降、わずかに増加しており、浄土平傾斜計では4月以降、火山活動に起因すると考えられる地殻変動がみられ始めています。また、2026年以降、大穴火口の一部の噴気温度が高い値で推移しています。一方で、大穴火口周辺における地熱域の拡大や噴気活動の高まりは認められず、地下の温度上昇を示す全磁力変化も認められていません。

以上のことから、山体浅部における熱水活動が高まる傾向がわずかに認められますが、明瞭な活発化とは認められず、火山活動は概ね静穏に経過しています。一方で、火山ガスの放出や噴気・地熱の活動は継続していますので、入山する際には注意してください。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページで閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

今回の火山活動解説資料（令和8年8月分）は令和8年9月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省東北地方整備局、東北大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ（標高）」を使用しています。



図1 吾妻山 大穴火口周辺の噴気の状況（7月7日）

- ・左図：上野寺監視カメラ（大穴火口から東北東約14km）の画像です。
- ・右図：東北地方整備局が設置している浄土平監視カメラ（大穴火口の東南東約500m）の画像です。

上野寺監視カメラ及び浄土平監視カメラ（東北地方整備局）による観測では、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状況に変化は認められませんでした。

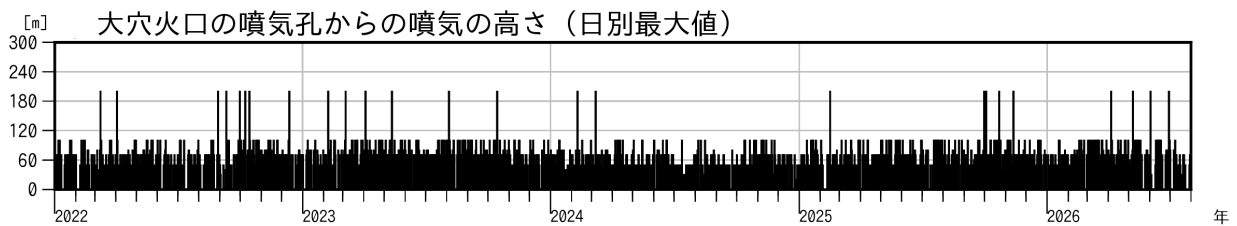


図2 吾妻山 大穴火口の噴気孔からの噴気の高さ（2022年1月～2026年7月）

上野寺監視カメラによる観測では、今期間、大穴火口の噴気の高さは100m以下で経過しました。

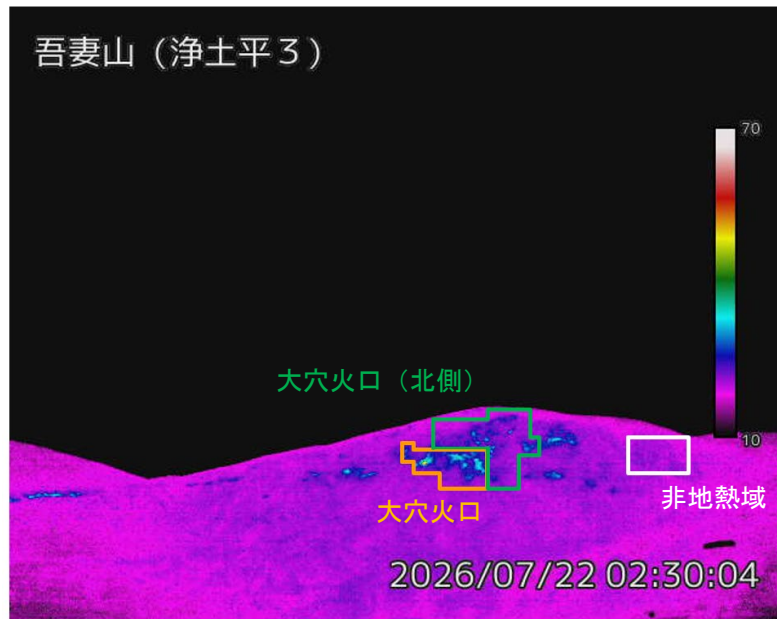


図3-1 吾妻山 浄土平3監視カメラからの地表面温度分布

・橙色及び緑色四角と白四角の領域は、それぞれ図3-2の解析における大穴火口の地熱域と非地熱域の領域を示します。

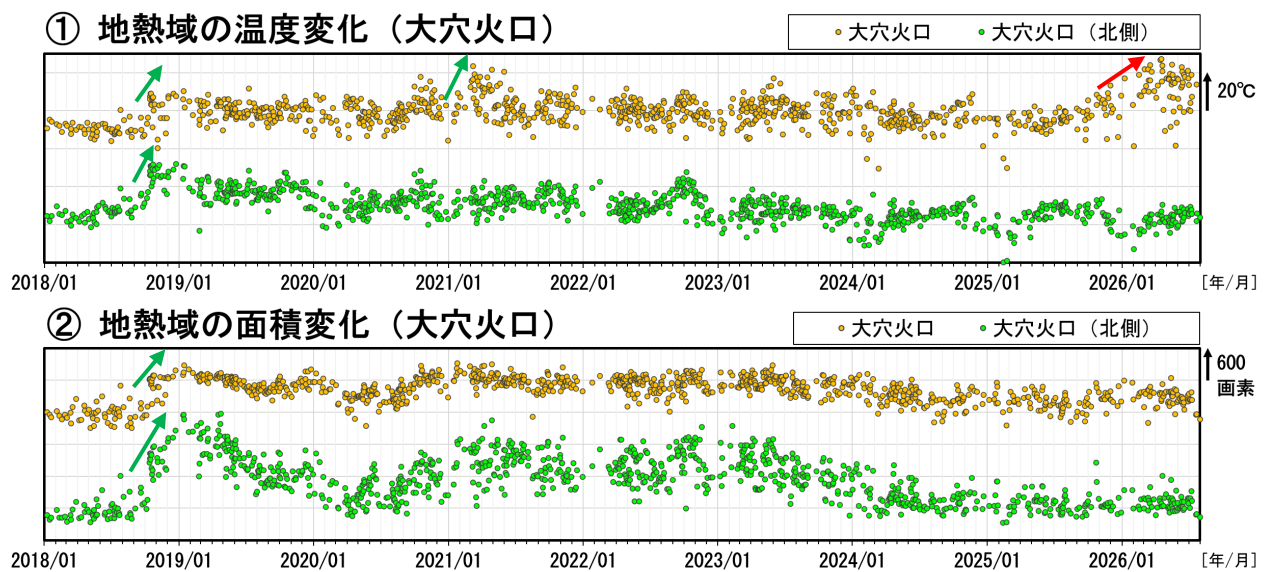


図3-2 吾妻山 監視カメラによる大穴火口周辺の地熱域の経過（2018年1月～2026年7月）

- ・①は各領域の最高温度と吾妻山の南約6kmのアメダス鷺倉の気温との差を示しています。
- ・②は領域毎に非地熱域（図3-1白枠）の平均温度より5℃以上高い領域の画素数を示しています。数値が大きくなるほど、地熱域の面積が拡大していることを示します。
- ・空白部分は天候不良等による欠測を表しています。
- ・これまでの火山活動活発化の際には、地熱域の面積拡大や温度上昇がみられました（緑矢印）。

2026年以降、大穴火口の一部の噴気温度が高い値で推移しています（①赤矢印）。地熱域の面積（②）に変化はありません。

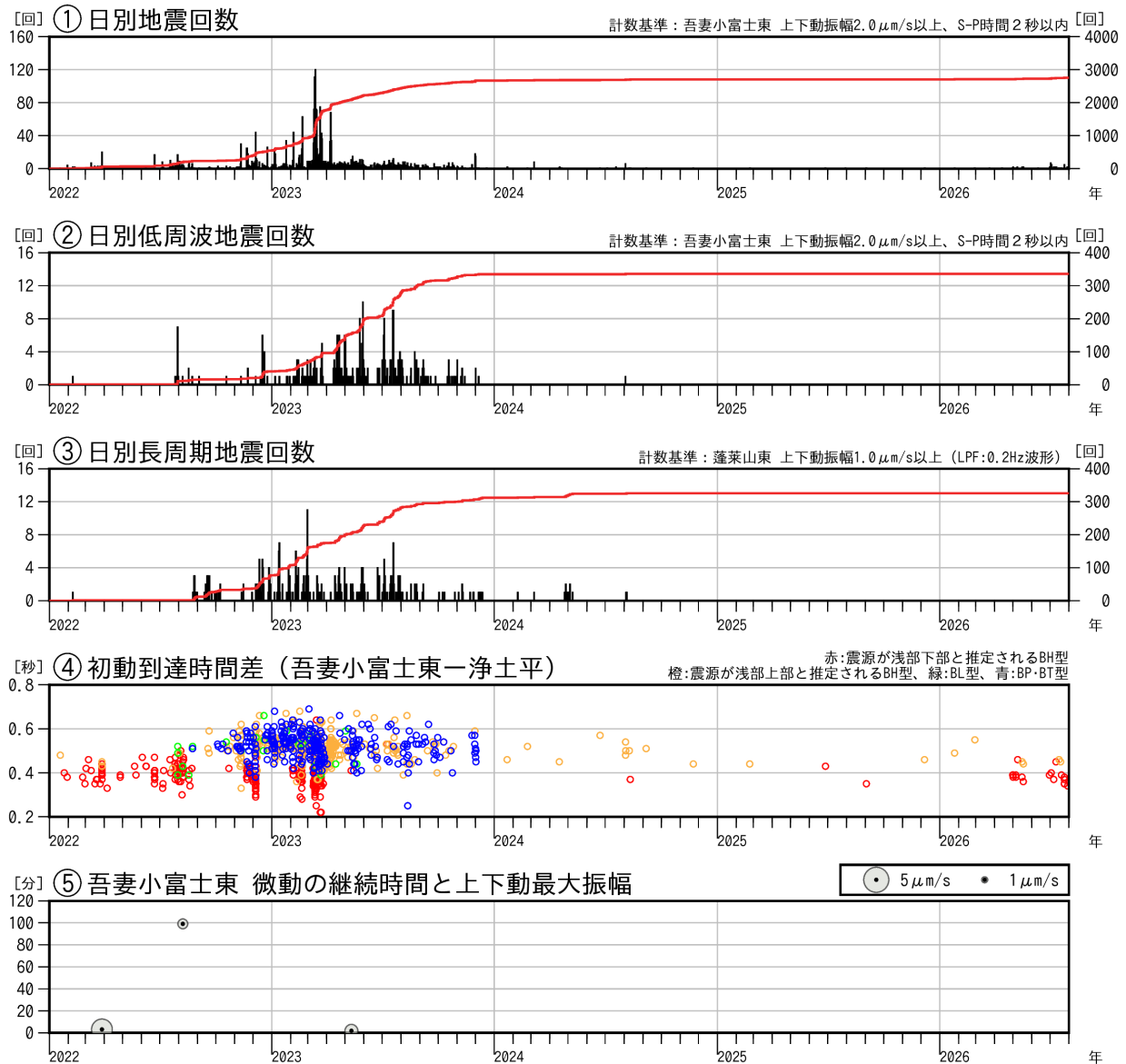


図4 吾妻山 地震活動（2022年1月～2026年7月）

・①日別地震回数に③長周期地震の回数は含まれていません。

火山性地震は概ね少ない状態で経過していますが、2026年5月以降、わずかに増加しています。大穴火口浅部の中でも、主に震源が下部と推定されるBH型地震の発生が観測されています。

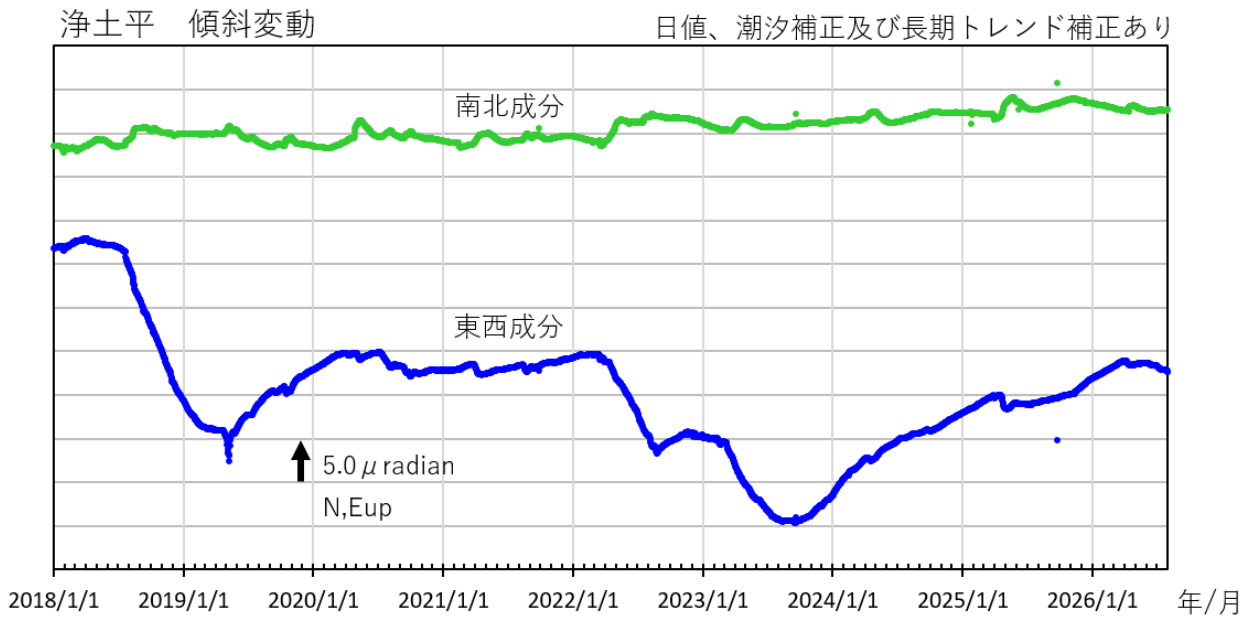


図5 吾妻山 浄土平観測点における傾斜変動（2018年1月～2026年7月）

・例年、融雪期には北西上がりの変動がみられる。

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1 km）に設置している傾斜計では、2026年4月以降、火山活動に起因すると考えられる大穴火口方向の隆起を示す北西～西上がりの変動がみられています。

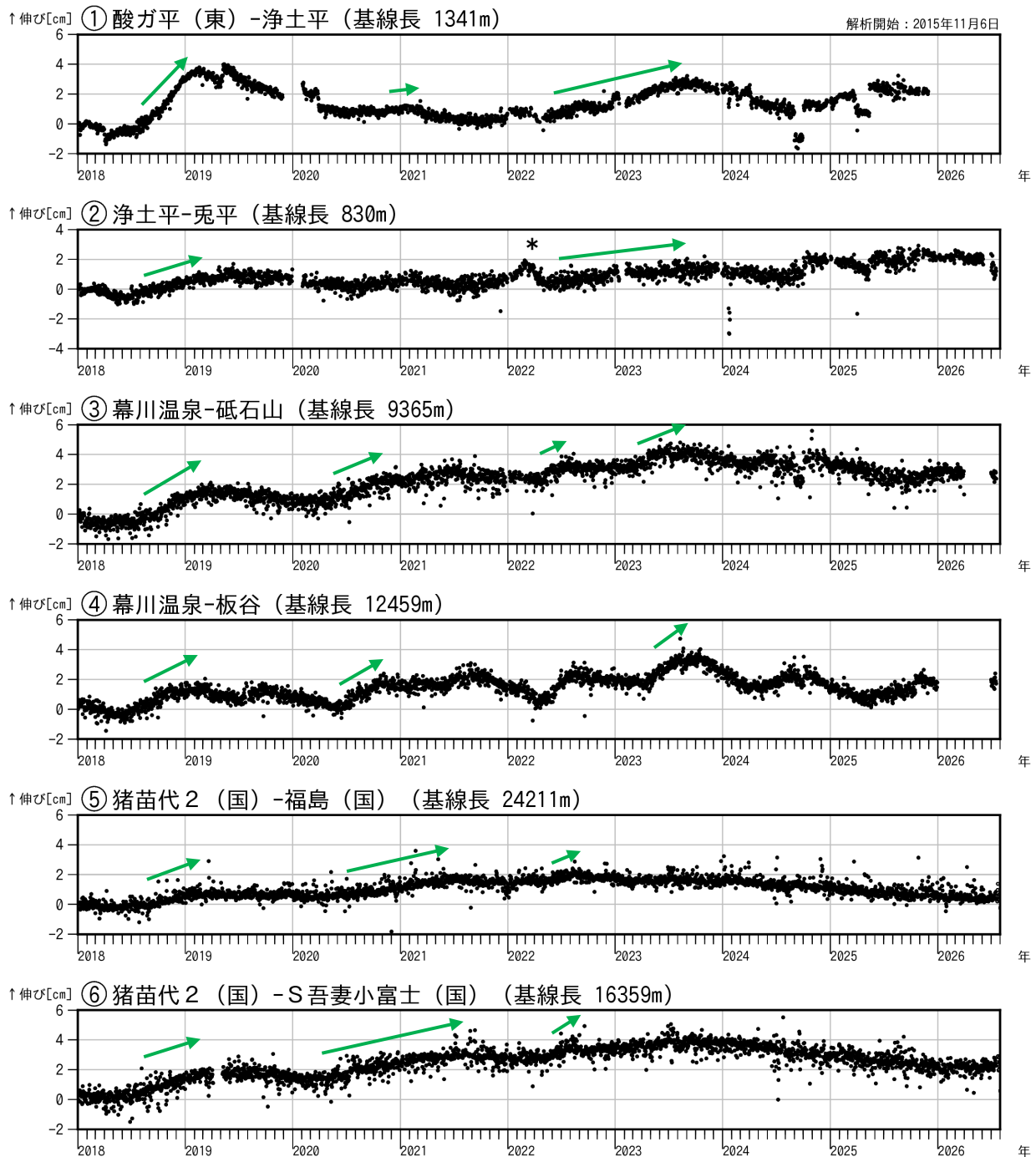


図6 吾妻山 吾妻山浅部・深部の地殻変動（2018年1月～2026年7月）

- ・①～⑥は図10のGNSS基線①～⑥に対応しています。・空白部分は欠測を示します。
- ・（国）は国土地理院、（東）は東北大学の観測点を示します。
- *：積雪等に起因すると考えられる変化で、火山活動によるものではないと考えられます。
- ・これまでの火山活動活発化の際には、大穴火口浅部や吾妻山深部の膨張を示す変化（緑矢印）が観測されました。
- ・①の基線では、今期間は観測機器の障害により観測値を得られていません。

大穴火口周辺の短い基線及び吾妻山周辺の長い基線では今期間、火山活動によると思われる変化は認められませんでした。

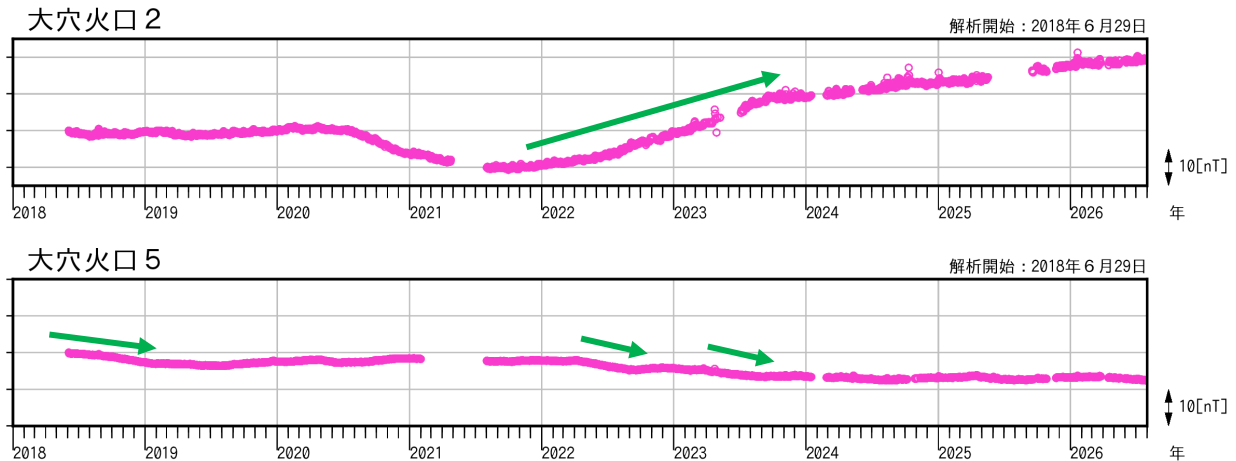


図7 吾妻山 全磁力連続観測点の全磁力値変化（2018年1月～2026年7月）

- ・各観測点の場所は図9に示しています。 ・グラフの空白部分は欠測を表しています。
- ・各観測点のデータは、参照点（大穴火口の南東約16kmにある上葉木坂西観測点）での観測値を基準とした、各日の夜間平均値です。
- ・これまでの火山活動活発化の際には、大穴火口北西地下の温度上昇を示すと考えられる全磁力値の変化がみられました（緑矢印）。

2023年後半以降、火山活動に伴う明瞭な変化は認められません。

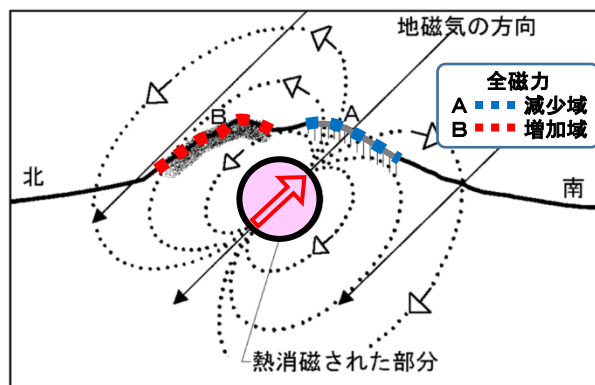


図8 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で増加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で増加	帯磁	低下

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えerことで説明できます。左図に示すように、火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

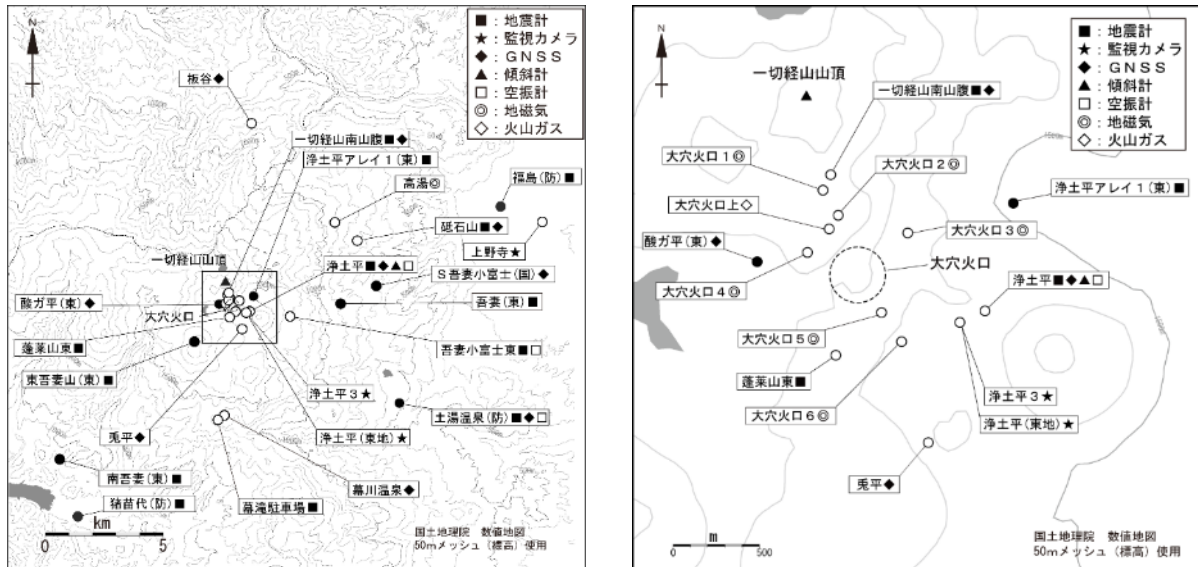


図9 吾妻山 観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 （東地）：東北地方整備局 （国）：国土地理院 （東）：東北大学 （防）：防災科学技術研究所
 左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。

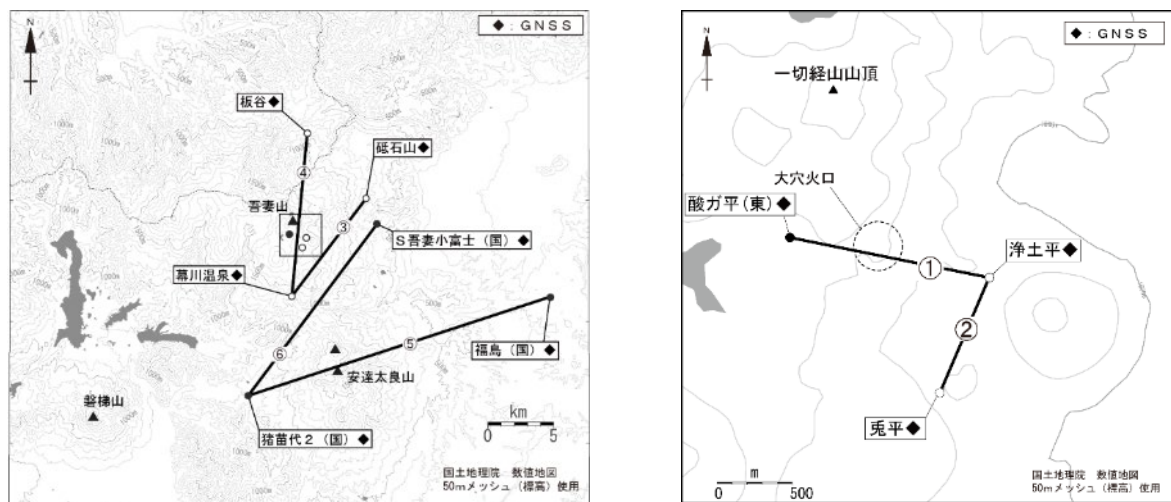


図10 吾妻山 GNSS 観測基線図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。 （国）：国土地理院 （東）：東北大学